

ジェンダーフリーの視点を育てる授業

—— 女性の働き方から見えてくるもの ——

家庭科 田 中 京 子

1 授業の目的と概要

女子校であることを生かして、ジェンダーフリーを目指した教育の可能性を家庭科の学習を通して研究している。公開研究会ではこれまでに2回、ジェンダーに関わる授業を行ってきた。今回は女性の職業生活について知りたいと思うことを自由に調べ、発表しあうなかから、ジェンダーへの気づきとジェンダーフリーを目指す意欲を育てたいと考えた。

2 授業の流れ

2年生は夏休みの課題として、身近な女性に生活と職業・職業観などをインタビューしてまとめた。これを資料として活用しつつ2学期の学習を進めた。2学期初めに各自のライフプランを描き、人の一生とライフステージごとの課題を明らかにした。その中では特に職業の選択と継続が共通の問題として出た。2年生117名のうち87名は結婚・出産後も職業を持ち続けるとし22名は育児中断再就職を選んでいる。結婚出産退職は8名を選んだ。女性と職業に関する法律・制度や現実の問題をグループに別れてさらに調べて発表した。2年菊組のテーマは次のとおりで、*の2班は次回発表となった。

1	子育て退職 (4名班)	5	研究者への道 (校長先生に聞く) (2名班)
2	仕事と女性 (働き続ける) (4名班)	6	自営業について (独立・起業) (4名班)
3	フリースタイルな働き方 (9名班)	7	育休・産休について (4名班)
4	結婚退職について (4名班)	*	働くマダムたち、資格と就職 (各4、3名班)

発表はプリント資料と黒板を使い、グループ全員が前に出て行った。

発表をもとに、女性労働の実態と問題点を、統計グラフなどを示し、次のようにまとめた。

- ① M字型労働の実態—先進諸国に比べて日本の女性労働力率はM字の谷が深い。潜在労働力率は高い。潜在労働力率は本校生のライフプランよりむしろ高い。
- ② 家事労働時間の男女比較・国際比較—日本は男性の家事時間が極端に短くその分女性が家庭責任(家事・育児)と職業労働を両方引き受け負担が重い。

- ③ 女性の子育て後の再就職の問題—①②と関連。パートを選ぶ理由とパート労働の問題点。
- ④ これからに向けての取り組み—留学生3人に自国の女性労働の実態を聞く。オランダの新制度を紹介。新たな制度に向けての発想の必要性を示唆する。

3 研究協議・まとめ

生徒の発表が生き生きと積極的で良いとほめられた。ふだんのままで行ったため、発表時間が延び、④に時間がとれず、まとめが不十分となった。もっと教師からの情報を盛り込むべきという意見と、生徒の気づきを大切に、発想の方向付けをさけ、多様な深まりをめざすべきとの意見があった。ご来校いただいた先生方、大学牧野先生、附小流田先生、附中栗原先生のご指導ご協力に感謝します。